

新渡戸稲造と北村透谷

——近代日本におけるクエーカー派の受容と展開——

森 上 優 子

はじめに

本稿の目的は、近代日本におけるキリスト教クエーカー派 (Quakers) の受容と展開について考察することである。教育者として、また「太平洋の橋」として国際舞台で活躍した新渡戸稲造 (一八六二―一九三三) と日本平和会の設立に参画し、平和運動を展開した北村透谷 (一八六八―一八九四) を取り上げ、両者の「心」に関する言説に着目し、クエーカー派を通じたキリスト教思想が近代日本における自己認識にどのように反映されたのかを検証するとともに、彼らの社会活動への影響についても言及してみたいと思う。

一 クエーカー派について

クエーカー派とは、一七世紀、ジョージ・フォックス (George Fox 一六二四―一六九二) がイングランドで創始したキリスト教プロテスタントの一派のことである。クエーカー派は、自らの拠り所を、聖書や信仰箇条よりも人種や階級、性別に区別なく、万人に宿るとされる「内なる光」(Inner Light) に見いだしているところに特徴がある。「内なる光」は、「キリストの内」在、「人の内なる神性」などという言葉としても表され、普遍的な真理であり、これを人々が知るには、観念としてではなく、内的な、神秘的な体験においてほかにはないとされる。

このような光の普遍性から、クエーカー派の社会活動の基本姿勢とは、万人に内在する「内なる光」に応えることであった。教

徒は、自分の持つ「内なる光」を、他者も持っていて、その同じ光に訴えて、真理へと近づき、全人類の結合、世界の一致を目指した。特に、階級、人種、社会的差別による上下の差を撤廃するなどの社会活動を進めた。

二 新渡戸稲造における「心」の把握

新渡戸がクエーカー教徒になったのはアメリカに留学後の一八八六（明治一九）年、ボルチモアのクエーカー集会、ボルチモア友会の会員になったときである。彼はクエーカー派の礼拝の特徴を「黙座冥想を主とし、各自直接神靈に交はる」（「信徒」、『燭雁の塵』全集）六巻 一三九頁）こととする。それは、儀礼などの形式を重視する当時の米国におけるプロテスタントの教会と比較すると神秘主義的傾向が強く、新渡戸は、クエーカー派により、「宗教は外部の形式にあらで内心の働きである」（「友会徒の生活」、『人生雜感』全集）一〇巻 二三頁）という宗教観を持ち得るに至った。このように、新渡戸は宗教において「心」を重視するが、その主張は生涯を通じて修養論や宗教論のなかで積極的に展開された。クエーカー派を通じてキリスト教を理解した新渡戸は、「心」をどのように把握したのであるか。

われわれを救したり告発したりできる一つの「力」が宿って働いている。この力が活動をやめると、われわれはすっかり暗黒となる。聖書は「彼」を称して「世に來たりてすべての

人を照らす「光」という。この「力」には生長力があるから、ジョージ・フォックスはこれを「種子」とよんだ。フォックスとその信徒は、またこれを「内なる光」と名づけた。（『沈黙の時間』『隨想録補遺』全集）二巻 二一六頁）

クエーカー派が重視する「光」について、フォックスは「心」によって、光の源であるイエス・キリストに向けているあなたがたはすべて、その光によってイエスを見ることができ」（『教會』『書簡』(Epistles) 九〇（二六五五））と語る。その光とは、「しかし、その方、すなわち、真理の靈が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである」（『ヨハネによる福音書』一六・二三、新共同訳）という言葉などで示されるごとく、「イエスの言葉に従って真理を更に深く我々に啓示することのできる神の言葉そのもの」であった。

新渡戸は「心」にこの「内なる光」が内在すると把握する。そしてこの「内なる光」の特徴を、普遍的であり、人種、男女、老若の区別なく、平等に万人に宿る点にあるとした。

人間には男でも女でも、貴きにも賤しきにも、又既に子供にても、フォックスの言ふやうに、その心に種子が植ゑつけられて居る。良心本心に基督の種子があつて、之を育てれば、即ち善を好み悪を憎むの觀念、神を畏れるの觀念となる。

（『クリスマスに就て』、『人生雜感』全集）一〇巻 一四七頁）

新渡戸は、「内なる光」の普遍性から精神的側面における人類の一致を強調する。万人の「心」のなかには生まれながらにして「内なる光」、「基督の種子」が内在すると認識する彼は、人間は例外なく、だれもがキリストとともにある存在でしかありえないという主張を繰り返し、人間の平等性の根拠とした。

また、新渡戸は「内なる光」が宿るが故に、「心」は行動の判断基準となるとした。

自分の心に省み良心に質して、正しいと思へば何処迄も違るといふ事である。根本は心である。心が正義とし、是なりと信ずる所を行ふ。

〔友会徒の生活〕、「人生雜感」全集「一〇卷 二九頁」
新渡戸は、「心が正義」とするところを行うべきであるとし、そのとき、「それは神の導きである」〔友会徒の生活〕、「人生雜感」三三頁」とする。このように、キリスト教倫理は、「内なる光」を内包する限りにおいて、万人が平等に負う神に対する義務とされ、新渡戸は、「心」を人間の自律的主体形成の枢軸に位置付けた。このキリスト教倫理が行動の判断基準となる点については、透谷の「心」の把握にもその共通性を見いだすことができる。

○真正の勸懲は心の経験の上に立たざるべからず、即ち内部の生命の上に立たざるべからず、故に内部の生命を認めざる勸懲主義は、到底真正の勸懲なりと云ふべからざるなり。

〔内部生命論〕全集「二卷 二四三頁」

○善悪正邪の区別は人間の内部の生命を離れて立つこと能はず、
……
〔内部生命論〕前掲 二四五頁
「内部の生命」とは、後述するところの「内なる光」の意と理解できる。次に、透谷とクエーカー派との関係、透谷の「心」の把握についてみてみたい。

三 北村透谷における「心」——「秘宮」

自由民権運動からの離脱による絶望のなか、石坂ミナとの出会いにより、キリスト教に入信するに至った透谷は、一八八八（明治二一）年に日本基督一致教会（後の日本基督教会）所属の教布基督教会に転会する。このように、彼は生涯を通じてクエーカー派に所属することはなかった。しかしながら、当時の彼の活動を振り返ると、クエーカー派との結びつきが密接であることがわかる。以下にまとめる。

①一八八九（明治三二）年〜一八九三（明治二六）年の間、大英聖書会社の代理人であるブレスウエイト（George Braithwaite）やクエーカー派の宣教師であるコーサンド（Joseph Casand）の通訳、翻訳者となった。その関係から、フレンド教会で演説を行っている。

②クエーカー派の加藤萬治とともに日本平和会を一八八九（明治三二）年に創立し、その機関誌「平和」の主筆となる。

③一八九〇（明治二三）年に、クエーカー派が経営する普通連士女学校の英語教師として就職する。

④クエーカー派の創始者であるジョージ・フォックスをカールイルの著『サーター・リザータス』(Sartor Resartus)を通して知っていた。「二宮尊徳翁」（一八九二）に、以下のような記述がある。

翁は稀代の理財家にして、而して独得の大信仰を有し、天来の心内生インナーライフによりて終生を犠牲的に職事し了りたる人傑なり。彼の英国の奇俊ジョルヂ・フォックス、を激称せしサルタ・レザルタスの記者今日若し有らば、必らず疾呼して尊徳翁を英雄の一人に数ふるなる可し。

（「二宮尊徳翁」全集、一卷 二五三頁）

「天来の心内生インナーライフ」という表現は、先の「内部の生命」に通じるものであり、クエーカー派が主張するところの「内なる光」の意であると考えられる。また、ジョージ・フォックスに関しては、新渡戸もカールイルの『サーター・リザータス』より知り得たと述べていることを考え合わせると、この書が日本におけるクエーカー派の受容に際し、重要な役割を担っていたと考えられよう。

透谷は、一八九二（明治二五）年から翌年にかけて、「各人心宮内の秘宮」、「心池蓮」、「内部生命論」、「心の経験」など、「心」を主題とする評論を精力的に発表する。発表の時期は、上に示したクエーカー派との親密な関係にある時とほぼ重なっており、こ

れらの言説にクエーカー派の影響を読み取ることは困難ではないだろう。透谷は「心」をどのように把握していたのであろうか。

透谷は、「心の経験」のなかで、心を「靈魂の謂にして、人間の生命の裡の生命なり」（「心の経験」全集、二巻 三一九頁）と述べるように、「心」を人間存在の枢軸に位置づけ、「神の如き性」が宿り、「神の事を経験する」場所と規定した。心に宿る「神の如き性」とは、「内部生命論」のなかで、命の躍動感が漲る「生命の木」（「内部生命論」前掲 二四〇頁）という表現が使われる。透谷は、この「生命の木」を「人間の心の中に植を付けた」ものこそキリスト教と理解した。彼は、「生命の木」、「神の如き性」が宿る場所を、「心」のなかの「秘宮」とし、「心」を二重構造と捉える。

心に宮あり、宮の奥に他の秘宮あり、その第一の宮には人の来り観る事を許せども、その秘宮には各人々に論じて容易に人を近かしめず、その第一の宮に於て人は其処世の道を講じ、其希望、其生命の表白をなせど、第二の秘宮は常に沈冥にして無言、蓋世の大詩人をも之に突入するを得せしめず。

（「各人心宮内の秘宮」全集、二巻 九頁）

「秘宮」は、人間社会と遮断された非日常の世界であり、「神の靈との親しき関係」（「心の経験」前掲 三三〇頁）を築く世界である。透谷は、「神の愛を味ひ、神の義を味ひ、神の恩を味ふものも心なり」（「心の経験」前掲 三三二頁）というように、「秘宮」の

気づきが、神を認識することに繋がる。透谷におけるキリスト教信仰は、新渡戸と同様に聖書や儀式よりも、人間と超越との関係を認識する内面的な信仰がその基盤にあるといえる。

ところで、透谷は、人間の「心」には本来的に「神の如き性」が宿っているという理解を示さない。「心は自己の意志を有するが故に、生命の裡の生命たるを得るなり。」(「心の経験」前掲 三一九頁)という言葉が示すように、「神の如き性」は「自己の意志」によって獲得すべきものであった。それは、換言すれば、「心の思求」(「心の経験」前掲 三三〇頁)の必要性を主張するものであった。「吾人の心は常に絶対に向つて何物をか求めつゝあり」(「心池蓮」全集二巻 一三八頁)、「救はるべき者になると否とは、彼の自力なり」(「各人心宮内の秘宮」前掲 一二頁)と述べるように、人間の「思求」の有無の点から、透谷における「神の如き性」の普遍性は保証されず、従つて、人間の平等性も保たれ得ない。この点に新渡戸との相違が顕著であり、クエーカー派の教義との距離が見い出される。

新渡戸が理解する「内なる光」とは、万人に平等に宿るといふ光の普遍性に基づくものであり、クエーカー派の教義が反映されていることはすでに見てきた。彼は、この光を媒介として、「無意識の行為で神を求め得る」(「昇る階段」全集一〇巻 一九六頁)と説く。それは、「己れの意志も無くして神の手に任せらる」(「昇る階段」前掲 一九六頁)ことであり、神に導かれるまま、

自己を神に全面的に委ねる姿勢を示している。ここに、沈黙のうち主を待ち望むクエーカー派の礼拝のあり様が思い起こされる。さて、両者にはこのような相違があるものの、新渡戸も透谷も「心」で邂逅する「神」を親和的な存在として捉える。

○何をするにも、一寸自分の心で神様に伺つてから、善いと思へば進む。(新渡戸「友会徒の生活」人生雜感「前掲 三二頁

○而して絶対は必らずしも遠く吾人の心を離るゝものにあらず。天国は常に近きにあるなり。(透谷「心池蓮」前掲 一三八頁)

ここで、「絶対」「天国」は、「神」とはほぼ同じ意味の言葉として使われ、それらは超越なる「他者」として把握される。その点は、フォックスが、光の体験を「汝らの心を主に結び合せ」(母簡二四(二六五⁵)など、「主」を「他者」として語るところに通じる。ところが、次の透谷の文章を見るとその「他者」性が曖昧になる。「心と宇宙とは其距離甚だ遠からざるなり、観ずれば宇宙も心の中にあるなり」(「心の死活を論ず」全集二巻 九七頁)。

それは、新渡戸においても、「神」との邂逅の体験の意とする「宇宙意識」を「全体」の生命と個人の生命との同一性を思索する(「日本人のクエーカー観」日本文化の隣接「全集」一九巻 四一六頁)と表現するところに見い出される。両者は自己の中に超越なるものを、また、超越なるものの中に自己を解消させていく。ここに、超越なるものと自己との距離が究極まで近づけられ、一体化するという新たな世界観が示されるが、これは別に詳細に検

討される必要があるだろう。

四 信仰と社会活動

次に、クエーカー派の特徴の一つである全人類の結合、世界の一致を目指した社会活動の視点から、新渡戸と透谷の活動について検証したい。

新渡戸は生涯を通して「実行」を重視した。

唯朝夕の祈祷に於て、神に近づき、神に交はり、神の力を心に実験して、之を身に顕はす様にするが何より肝要の事である、宗教を研究するのは実行に於てする外は無い。

（「宗教とは何ぞや」、「人生雜感」、「全集」一〇巻 二二頁）

新渡戸は、「実行」することによって、「宗教の極意」に達すると理解する。神の御旨は常住坐臥の行動に悉く表れる。ここに、キリスト教実践倫理を見い出すことができる。「内なる光」の普遍性に基づく社会活動の重視はクエーカー派の特徴のひとつでもあり、国際交流や教育活動など多方面で活動した新渡戸においてそれが顕著である。新渡戸は、「内なる光」を媒介として、人間と神との一体化を遂げた後、それを観念の世界にとどめるのではなく、社会に対して愛というかたちで実践することによって神の御旨の具現化を強調した。愛は自己と他者を結びつけ、その愛を基盤とする社会を構築することによって、神の御旨は可視化される。それは、矛盾や不調和、不安に満ちた人生において、愛によ

る「調和」を与えるものとして重視された。

クエーカー派の中心的教義である「内なる光」の普遍性による人間の「調和」の構想、すなわち、世界平和の構想が新渡戸の多方面にわたる活動の中心にあったと考えられる。新渡戸の平和構想に基づく活動は、当時における東洋と西洋の分断、人間の闘争に対して、人間に内在する「内なる光」の絶対的信頼の上に行われた。

それに対して、透谷の場合は、どうだったのか。「文芸（純文学と言ふも宜し）の範圍に於て、根本の生命を伝へんとするは、文芸に従事するものゝ任なり」（「内部生命論」前掲 二四四頁）という一文が彼の使命感を力強く表している。透谷は、人間存在の中核とした「根本の生命」の気づき、すなわち、人間の生の検証を伝播する使命を悟り、文筆活動に専念した。透谷の活動の思想的背景には、「天地の経綸はひとり世界経済の手」にあるのではなく、「コンシステント（調実）」（最後の勝利者は誰ぞ」、「全集」一巻 三三八頁）である「基督」にあるという世界観が存在した。「心の基督に通じたるとき、すなわち、心の奥の秘宮開かれて、聖靈の猛火其中に突進したる瞬間」に、「真に基督の弟子」となる（「各人心宮内の秘宮」前掲 一一頁）と語るところから、透谷は、「基督」による「調実」が支配する社会への転換に向けて、各自が「真に基督の弟子」となること、すなわち、内的平和の構築を最優先させたのではなからうか。従って、透谷の場合、新渡戸の

ように、人間存在を「内なる光」を媒介とした神との関係性から捉える垂直方向による認識が、人間間における愛の実践という水平方向へと転換するというよりも、むしろ自己と神との世界を重視する傾向が強く、観念の世界に閉じる構造を持つといえるだろう。透谷において、クエーカー派の特徴のひとつである光の普遍性に基づく実践重視の点は、新渡戸と比較すると消極的であったことは否めない。そこには、クエーカー派の人々との親密な関係を築きながらも、自らがクエーカー教徒としての生を選択しなかつた透谷の意志が表れている。

おわりに

以上、新渡戸稲造と北村透谷における「心」の言説を手がかりに、近代日本における自己認識について考察してきた。その結果両者における人間観には、「心」において超越なるものとの関係性を認識するという内面的な信仰が大きな意味を有することがわかった。これらは、クエーカー派を通じたキリスト教思想が反映された。近代日本における自律的主体形成のひとつのあり方であった。このような両者の思想は、近代日本の思想状況の特徴とされる「内部」への超越⁷という思想の系譜に位置付けることができるであろう。

クエーカー派の教義に基づく人間観はその後、「新渡戸先生より人は人を学ん⁸」だと述べする矢内原忠雄をはじめとする新渡戸か

ら薫陶を受けた弟子たちに継承されるとともに、「修養」⁹、「世渡りの道」などの修養書を通じて一般の人々に広く浸透した。このことから、「内部」への超越⁷が受容される思想的基盤は階層を超えて当時の日本に構築されていたことが窺える。

本稿における新渡戸稲造の著作の引用は、『新渡戸稲造全集』教文館（一九六九―二〇〇二）、北村透谷の著作の引用は、『透谷全集』岩波書店（一九七八―一九七九）による。

(1) クエーカー派についての解説は、シドニー・ルーカス（編）、入江勇起男訳『クエーカーの真義』（基督教友会日本年会 一九五二）、ハワード・H・プリントン 高橋雪子訳『クエーカー三百年史―その信仰の本質と実践―』（基督教友会日本年会 一九六一）、ルイス・ペンスン 小泉文子訳『クエーカー信仰の本質』（教文館 一九九四）などに詳しい。

(2) 前掲、『クエーカー三百年史―その信仰の本質と実践―』四〇頁

(3) 前掲、『クエーカー三百年史―その信仰の本質と実践―』四九―五〇頁

(4) 新渡戸は、『サーター・リザータス』において、「私はジョージ・フォックス賞賛を学んだ」（私が友会徒となった理由）（ポルティモア友会機関誌『インターチェンジ』二八八年三月二日）『全集』二巻 四八頁との記載がある。

(5) 前掲、『クエーカー三百年史―その信仰の本質と実践―』一〇七頁

(6) 拙稿「新渡戸稲造における「調和」―「修養」概念をてがかりとして―」（二〇〇四年九月『日本思想史学』三六号（日本思想史学会）一五九―一七六頁を参照されたい。

- (7) 竹内整一『自己超越の思想』弘文堂 一九七八 八三頁
- (8) 『内村鑑三と新渡戸稲造』『矢内原忠雄全集』二四卷 岩波書店
一九六五 一三四頁
- (9) 『修養』の発行部数は一九二四年に縮刷版として二九版、一九二四年には一〇〇版に及ぶ。(『全集』七巻 解題 六九一頁)
- (もりかみ・ゆうこ、近代日本思想、お茶の水女子大学)

比較日本学教育研究センター客員研究員